

「我ら民草は、生まれ落ちてよりさまざまな罪穢れを負うております。ゼズスキリシトは、死に値する『モルタル科』として、七つの科を挙げられました。一つは驕慢、二つは貪欲、三つは邪淫、四つは瞋恚、五つは貪食、六つは嫉妬、七つは懈怠。この科に未だ犯されぬ清き乙女、ビルゼンなるものとしてサンタマルヤはデウスに選ばれ、不可思議なる力により救い主を懐胎なされたのです」

「夫を持たんのが清いちゆうんか。月のもものが始まつたら血の穢れか。天主教でも、おなごはやつぱり穢れとるちゆうんやね」

その時、ジョアンの言葉を遮って、さきが大きな声で言った。

「やつぱり、おなごは血の穢れで、死んだら血の池地獄に落とされるんかいの。天主教も浄土真宗も皆おんなじや。坊さんはみなそう言うて、さんざんおなごを脅しよる。そのくせ自分らは女犯のし放題じや。坊さんにろくなもんはおらんわ」

さきは、吐き捨てるようにそう言った。たえは、あらためてその顔を見た。この女も、何事か辛い目に遭ったのかも知れないと、そう思った。

ジョアンは首を振り、あくまでも静かな口調で言葉を返した。

「確かに、女は血の穢れを負い、かつまた邪淫の罪

に陥ることもありましよう。されど、己の罪を知り、悔い改めたならば。デウスは広い心でそれをお赦しくだされます。ゼズスキリシトの御代にも、邪淫の魔に憑かれた女はおりました。魔に憑かれた女なるマルヤ・マツダレナがキリシトのお姿に心打たれ、そのおみ足を拭おうとされました。弟子らが、穢れた手で御主に触れてはならぬと咎めた時、御主宣いて『汝等の内で一切の過ち無き者のみこの女に石を打て』と。弟子らはみな黙りました。マルヤ・マツダレナはキリシトに帰依され、敬虔なるデウスの使徒となられたのです」

「へえ、そうなん」

と、たえは思わず声を出していた。ジョアンがそちらを向いて、軽く微笑んでうなずいた。

「今生に罪を犯さぬ者はありませぬ。我らは皆、生まれ落ちし時より罪穢れを負っております。ただ己の穢れなるを知り、悔い改め、デウスの御わざを観念し奉る者のみが赦され、来世はデウスの御国に至る道が開かれるのです」

ジョアンは言つて、ゆつくりと人々の顔を見回した。目を合わせた相手は、思わず、ほうとうなずいてしまう。確かに、この若者は言葉で人を惹きつけるのに慣れているに違いなかった。しかし、

「はあ、やっぱり身持ちをようして、欲持たずして

生きろちゆうんやね。坊さんの言うことはみな同じや。そんなら、うちらみたいなおなごはいつまで経っても救われん。どないして喰うていけ言うんな。そんな話聞いてもしようむない。うちは眠たいさかい、もう去ぬで」

大声で言ったのはさきだった。気怠げに髪をかき上げて立ち上がると、さつさと木戸を出て行った。その勢いに、ジョアンが言葉に詰まって、しばし黙ってしまふ。女たちは顔を見合わせ、気まずそうに、そそくさと立ち上がった。泊まり客も急に興味を失ったように立って行ってしまい、下男や女中たちもさつさと仕事に戻っていった。

板敷の間に、ぽつんとジョアンとたえだけが残された。ジョアンは、ぺたりと力なく座り込み、ふうと溜息をついた。たえは

「すまんねえ、うちのおなごがあんなこと言うてしてもて」

と謝った。ジョアンは首を振り、

「いいえ、私の説教が至りませぬのです」

たえが白湯の入った湯飲みを差し出すと、

「有り難うございます」

とジョアンは頭を下げ、一口飲んで、

「皆さまのお気に障りましたでしょうか。もつと平易に説かねばと、いつも心がけておるのですが、

女人に説くのは、誠に難しい。私がまだ若年で、女人を心得ておらぬゆえかもしれませぬ」と、自嘲のように呟いた。

「いいや、ジョアンさんはようやつとるよ。こんな誰も知らんところでねえ」

たえは、何を言っているのかわからなかったが、とりあえず慰めた。

「ジョアンさん、山口の生まれや言いよったけど、こないしてあっちこっち行って説教しよんやろ。そら大変なことやわ。お里はどこにあるん。父さん母さんは？」

「二親はどうにありません。親からつけてもろうた名も、もう忘れてしまいました」

ジョアンは何でもないことのように微笑んで言った。たえの方が恐縮してしまい、

「ほんまな。それは済まんこと聞いたねえ、堪忍してな」

「いいえ、本当のことですし、何も辛いことはございません」

ジョアンは笑い、手にした湯飲みの白湯を、ゆつくりと飲み干した。それから足を座り直して、

「ジョアンという名は、デウスに仕える者の証として、養い親なるパーデレ・トルレスから授かった名です。私は山口で生まれ、父母ともデウスに帰依し

た信者であつたそうですが、山口が毛利軍に攻められました。時に、私一人を残して行方知れずになつたと、後にパーデレから聞かされました。おそらく戦に巻き込まれたのでしよう」

「あれまあ」

たえは思わず、口に手を当てた。ジョアンは微笑み、

「それで、戦で山口の大道寺も焼けてしまいましたので、パーデレ・トルレスはじめ主立ったパーデレ方は、大友のお殿様のお膝元である豊後府内に移られ、私はパーデレ・トルレスを父として育ちました。あの方がおらねば、私は生きてはおられませんでした」

何事か思い出すように、ジョアンはふと目を伏せた。

「パーデレは私をお育てくださったのみならず、私のように戦で親兄弟を亡くした子らを救う育児院を作られました。また、医術の心得もあられたので、施療院を作られ、行き場のない老人を養う家も作られました。それらは皆、今は府内の信徒が力を合わせて営んでおります。誠に、パーデレは我ら信徒の皆にとつての御父であられたのです」

「そのお方は、今どこにおられるん？」

「三年前に、肥前志岐で亡くなられました。されど

パーデレの御魂は天の御国へ上り、デウスの御元に
て真実の快樂に浴しておいででしょう。その行いは
誠に、デウスの御教えにかなうものであられたと思
います。パーデレは、親に捨てられた私を育て導く
のは、デウスの御教えに叶うことなのだ、常々説
いておられました。私がこうしてデウスの教えを
広めているのも、パーデレ・トルレスの御ためなの
です。正しき行いを弘め、死して天の御国へ上り、
パーデレに再びお目見えするのが私の悦びなので
す」

そう言つて、ジョアンはにっこりと笑つた。

「ジョアンさんは、信念がおありになるんやねえ」
たえは感心して言つた。

「信念というものではありません。私は物心ついて
より、こういう話をパーデレに聞かされて育ちまし
たゆえ、それが当たり前なのです。もし私が仏教の
寺に預けられていたなら、まったく違う生き方であ
つたらうし、天主教を排斥する立場になつたやも知
れませぬ。それもまたデウスの御心であり、人には
計り知れぬ天の御意志でございましょう」
ジョアンは屈託のない笑顔を浮かべて、そう言つ
た。

「息ついたジョアンが二階へ上がり、たえは水を

くみに外へ出た。すると、木戸口の外に、さきが小袖の襟をはだけた姿で立ち、相変わらず髪をぼりぼり搔いていた。夜のしどけない様子しか知らない客が見たら、興ざめの格好ではある。

「なんや、あんた、寝に行つたんと違うん」
たえが聞くと、

「いっぺん起きてしもたら寝られへんがな」
と仏頂面で言う。それから、屋内をうかがうように見て、

「なあ、あの若いパーデレさん、いつまで居るん？」
「堺行きの船がまだ来いへんし、お連れさんの具合が治るまでで言いよつたさかい、もう何日か居られるやろ」

「ふうん」

さきは腕を組んで、

「毎日あんな説法されたらかなわんなあ」
と呟いた。たえはふと、

「なあ、あんた、何か坊さんにされたん？」
と聞いてみた。さきは驚いて、

「何でそんなこと聞くん？」

「さつき、パーデレさんにえらい突っかかっつたし。何か嫌なことあつたんか思つて」

たえの言葉に、さきは

「何もないわ」

とつつけんどんに答えたが、しばし黙り込んだ後、
ぽつりと話し始めた。
(以上4月25日放送分)